

学校自己評価実施の手引き

三重県総合教育センター

目 次

基本的な考え方	1
1 私たちがめざす学校の姿とは	
2 動き出そう	
(1) まず足もとを見つめる	
(2) そして課題を明らかにする	
(3) 次に、全教職員の共通理解を図り、めざす姿を明確にする	
(4) 確かな教育を行う	
3 これからの評価活動	
(1) これまでの評価活動	
(2) これからの評価活動	
学校自己評価システムとは	3
(1) 誰が評価するのか	
(2) 情報の発信・受信と結果責任（アカウンタビリティ）	
(3) サイクルの継続と向上を考える	
* 学校教育目標に向かう教育活動（イメージ図）	
学校自己評価システムの運用	6
1 学校自己評価システムの流れ	
2 基本的な実施内容	
P L A N	
D O	
C H E C K	
A C T I O N	
実施にあたって	11
資料	12
1 学校自己評価システムシート	
P D C A サイクル確認表 A	
課題別評価表	
P D C A サイクル確認表 B	
2 平成12年度に実施された県立学校での取組実践項目	

I 基本的な考え方

1 私たちがめざす学校の姿とは

学習者起点の立場に立ち、子どもたちの豊かな心を育み、個性と創造性、意欲と活力に満ちた人づくりをめざす学校とは、

児童生徒と教職員一人ひとりが生き生きとしている「活力のある学校」であり、児童生徒や保護者、地域との確かな連携がとれている「信頼される学校」であると考えます。

子どもたちの豊かな成長のために、学校の在り方を見直し、活力に満ちた信頼される学校づくりをめざすための一歩を踏み出しましょう。

2 動き出そう

(1) まず足もとを見つめる

学校づくりのスタートは足もとを見つめることです。それは、次の二つの声に耳を傾けることではないでしょうか。

一つは、学習者である児童生徒、その保護者や地域の人々の声です。これまでは、学校に関わるこれらの人たちの声を聞き、それを生かすことが十分できていたとは言えない状況ではなかったでしょうか。

もう一つは、日頃ともに教育活動を実践している仲間（教職員）の声です。教科指導をはじめ生徒指導・進路指導・学校行事など、すべての教育活動について、機会をつくり話し合うことが大切です。様々な人々の声に耳を傾けて学校の状況を的確に把握することが大切です。

(2) そして課題を明らかにする

様々な声に耳を傾けて足もとを見つめていくと、あらためて児童生徒の良さや、学校としての良さに気づきます。また、これまで見過ごしてきた課題なども見えてきます。これらの伸ばしたい点、改善したい点などについて十分話し合い、現在の自分たちの学校の課題を明らかにします。

(3) 次に、全教職員の共通理解を図り、めざす姿を明確にする

足もとを見つめ、課題を明らかにするとともに、学校教育目標について全教職員の共通理解を図る必要があります。多くの学校で「教育方針」や「教育目標」をもとに「努力目標」等が設定されています。その努力目標等を「めざす姿」としてより分かりやすい具体的なものとして設定し、その姿を現実のものとするために、教職員一人ひとりがどのような教育活動を展開していくかを考えます。

(4) 確かな教育を行う

今、多くの人たちから学校が自ら適切な評価を行い、それをもとに効果的な教育活動を進めていくことが求められています。効果的な教育活動を行うためには、足もとを見つめ、課題を明らかにし、めざす姿を設定し、その姿に向かって目的・組織的な教育活動を展開し、結果の適切な評価をもとに、具体的な実行方策を設定することが大切です。

さらに、学校がこれら一連の活動をシステムとして継続的に機能させ、経過や結果などを、自ら公開していく姿勢を持つことが確かな教育につながると考えます。そして確かな教育を継続することが、ひいては公的機関に求められている責任の一つである「結果責任（アカウンタビリティ）」を果たすことにもなっていくます。

3 これからの評価活動

(1) これまでの評価活動

学校はこれまでも、行事の後や年度末に教育活動を振り返り、互いに意見を出し合い、次への改善を図ることを目的として評価を行ってきました。

しかし、その評価活動には、次のようないくつかの問題点が指摘されています。

- ・ これまでの評価活動の多くは、行事が終わったときや、年度末などの教育活動が終了したときに行うことが多く、活動の途中で行うことが少なかった。
- ・ 関係者からの意見や感想が多く、具体性や客観性にやや欠ける面があった。
- ・ 次への課題は検討されるが、具体的な改善提案などの十分な話し合いがなされないままに年度を終えてしまうことが多かった。
- ・ 反省や評価をするときのもとになる資料が、意見を求めやすい校内の教職員に限定されがちであった。

(2) これからの評価活動

これからの評価活動は、評価することで見つかった改善点を次の活動に確実につなげていくことが何より大切になっていきます。

それに加えて、「改善を図る」という評価活動のねらいそのものについて考え直していくことも大切です。評価活動の結果から分かるものは、改善点だけではありません。児童生徒の持っている良さや、その学校の雰囲気や体制としての良さ、教職員の良さもあります。それらの良さを浮き彫りにしていくという視点を取り入れていくことが必要になってきます。そのような考えから、この手引きでは、問題点を直すことを強く意識する「改善」ではなく、良さも含めて新しく次の一步を踏み出す「更新」という言葉で説明します。

さらに、評価活動を具体的で客観的な事実にもとづいて行うことが、確かな教育を継続することや、結果責任を果たすために必要なことです。評価活動を支える具体的で客観的な事実を得るための一つの方策として、できるものについては数値化した基準等を利用していくことも検討してください。

このようなことから、これからの評価活動において、次のようなことを行うことが大切になってきます。

活動の後に一度だけ評価するのではなく、途中でも何度か中間評価を行う。

努力目標等を実現するために、教育活動の達成状況を判断する具体的でわかりやすい基準を設定し、その基準にもとづいて行う。

中間評価を踏まえて教育活動や基準を見直したり修正したりするなど、常に目の前の児童生徒の実態に合わせて柔軟に取り組む。

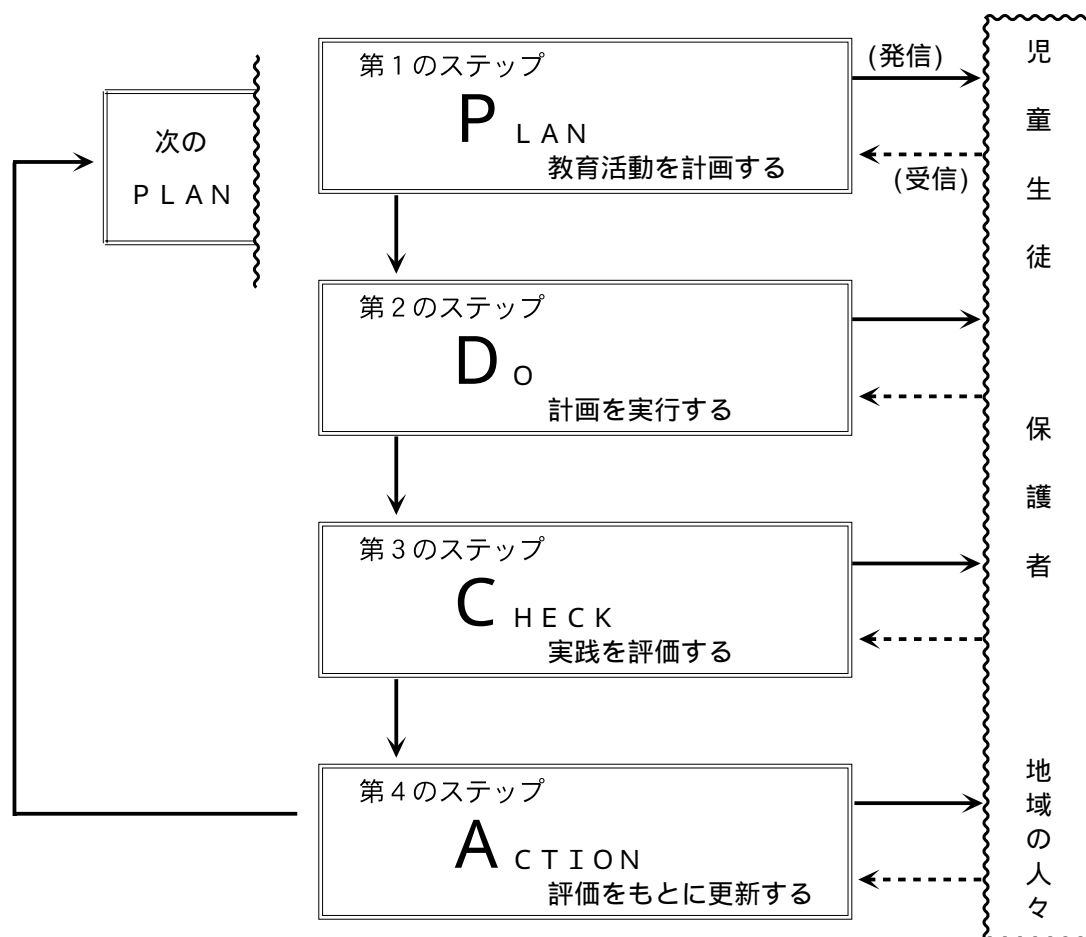
多くの意見を生かしたより客観的な評価活動を行う。

児童生徒・保護者・地域の人々等が納得できる、具体的あるいは客観的な事実をもとに、結果責任（アカウントビリティ）が果たせるようにしていく。

確かな教育活動が継続され、納得と信頼を得るためには、評価活動が有効に機能しなくてはなりません。そのためには、上記のような評価活動を学校経営の中の一つのシステムとして確立させておくことが大切です。

II 学校自己評価システムとは

日々の教科指導をはじめ、学期としてまた年間としての教育活動、種々の学校行事などのあらゆる活動の中には共通する次のようなステップがあると考えます。



P・D・C・Aのそれぞれのステップは、関連しながらサイクルとして動いていきます。

児童生徒の姿が、学校教育目標やめざす姿で示されている姿に近づくためには、一つひとつの具体的な教育活動が「PDCAのサイクル」によって動くとともに、そのサイクルが学校教育目標に向かって繰り返されていくが必要になってきます。つまり一つひとつのステップを意識し、そのステップをサイクルとして繰り返していく「更新のためのシステム」を学校の中に確立していくことが大切です。

教育活動を支えるこのPDCAのサイクルを生かし、評価を継続的な更新に結びつけていくシステムを「学校自己評価システム」と定義しました。

(1) 誰が評価するのか

学校における教育活動は、学校が自らの責任のもとに、主体性をもって意図的・計画的に行います。ですからその評価も、学校が主体的な活動として責任を持って行わなければなりません。またその評価には、より客観性を持たせる工夫が必要です。そのために大切なことは、評価の資料となるものを、学校としてどれだけ幅広く集めるかということです。とりわけ学校の教育活動に対する様々な人たちの意見はとても大切です。

(2) 情報の発信・受信と結果責任（アカウンタビリティ）

評価の資料となる意見を幅広く集めるためには、教職員をはじめ児童生徒や保護者、地域の人々、教育関係機関など、学校に関わる多くの人たちからの意見を受け取ることができなければなりません。そのためにはまず、学校教育目標やめざす姿、そしてめざす姿を実現するための教育活動等を知ってもらう必要があります。

学校自己評価システムでは、このように学校からどんな情報をどんな形でいつ発信するか、また学校に関わる人々からの情報をいつどんな形で受信するか、といった情報の発信と受信が大きな要素になります。

様々な情報を発信することは、公的機関として果たすべき責任の一つである「結果責任（アカウンタビリティ）」につながっています。学校が教育活動の目的やその結果を伝え、児童生徒や保護者、地域の人々の納得と信頼を得るためには、必要な情報を必要なときに提供することが大切です。そしてその情報の根拠として、具体的で客観的な資料を用意しておく必要があります。

* 情報の発信・公開にあたっては、個人情報の保護などを含め、今後その在り方を学校現場をはじめ関係者で十分検討していく必要があります。

(3) サイクルの継続と向上を考える

一つひとつの教育活動の中にあるP D C Aのサイクルを確実に実行することによって、次のサイクルでめざす姿が明確になります。さらに、その姿に向かってサイクルを積み重ねる、といった継続性が生まれることで、更新が確かなものになっていきます。

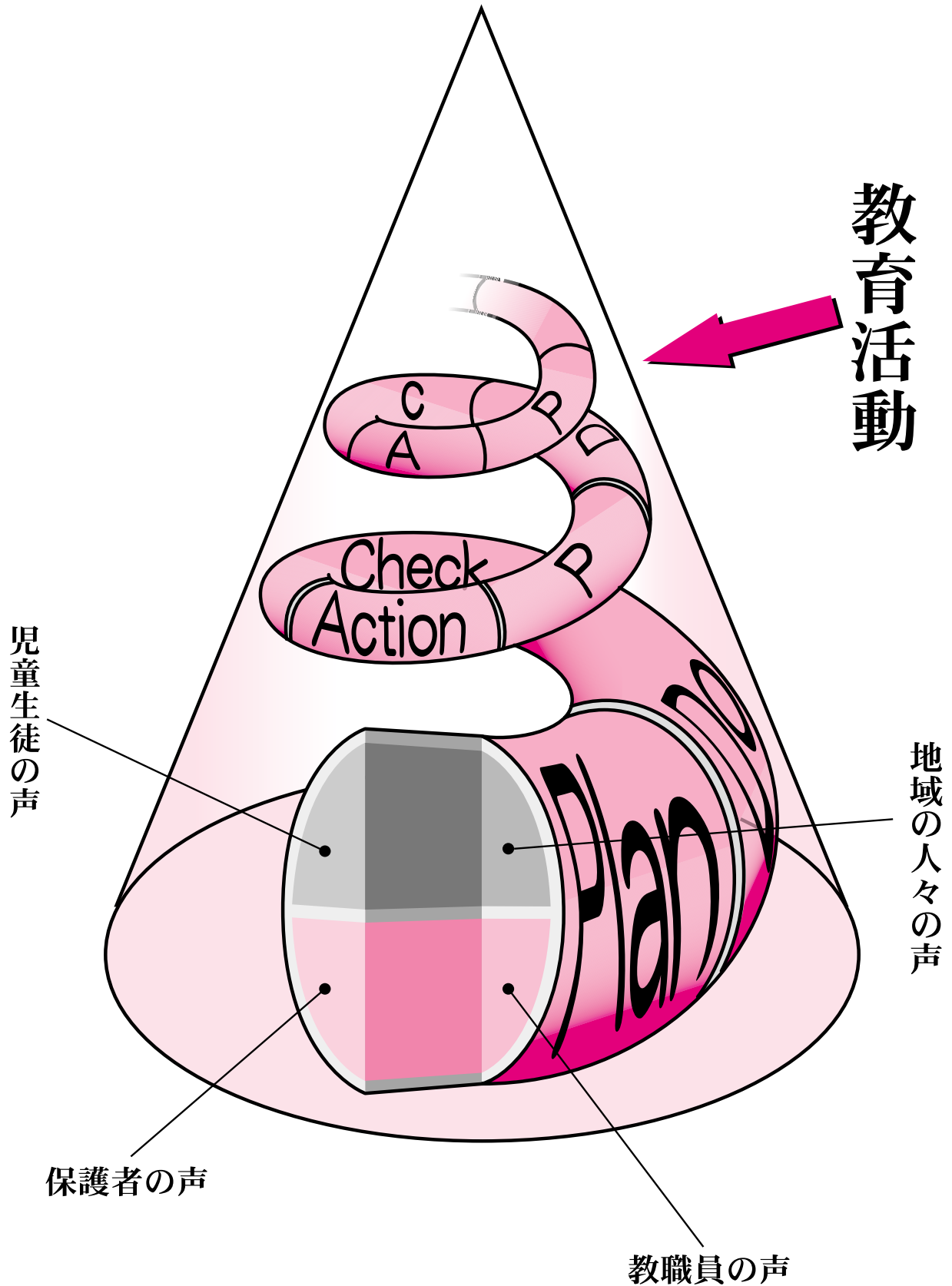
その結果、学びの場が児童生徒一人ひとりの個性と創造性をより尊重した学習者起点のものへと再構築され、活力のある学校・信頼される学校が創られていくと考えます。

学校自己評価システムの考え方を一つの図にしてみると、右のようになります。

- ・学校教育目標に向かって、個々の具体的な教育活動が繰り返されながら向上し、その目標に近づいていく。
- ・個々の教育活動はP L A N・D O・C H E C K・A C T I O Nの4つのステップにより展開される。
- ・P・D・C・Aそれぞれのステップの中に児童生徒、保護者、地域の人々、そして教職員の願いや意見などが反映されている。

学校教育目標に向かう教育活動(イメージ図)

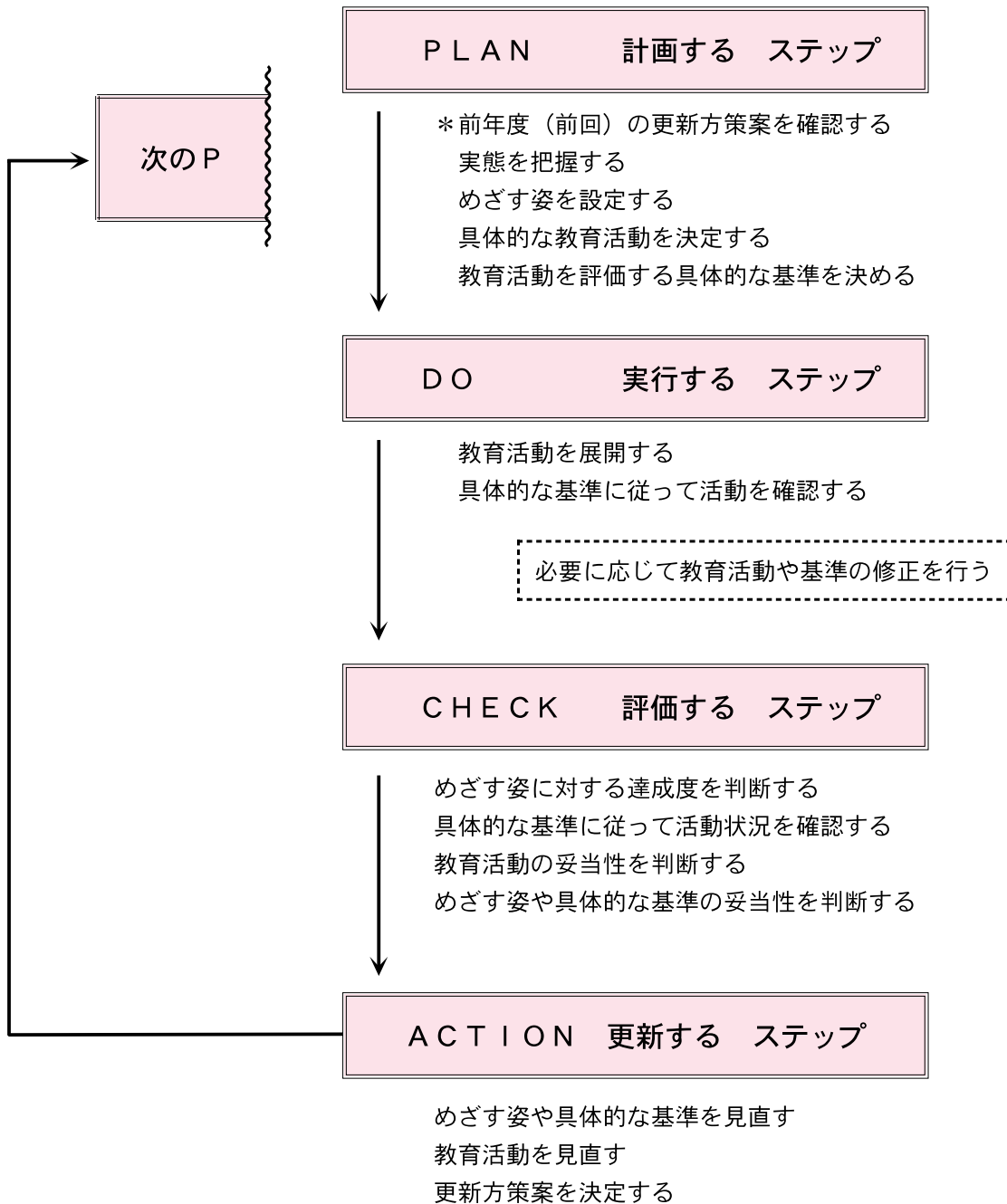
学校教育目標



Ⅲ 学校自己評価システムの運用

1 学校自己評価システムの流れ

ここでは、学校自己評価システムの流れについて、学校教育目標に向かった教育活動の中の一つのサイクルを取り上げて説明していきます。



*ステップをつなぐ矢印は、各ステップの連続性を示しています。
ステップの中の活動の順序性を示すものではありません。

2 基本的な実施内容

PLAN 計画する ステップ

*前年度（前回）の更新方策案を確認する

継続的な実践の場合は必ず前年度又は前回の更新方策案を確認することから始めます。特に、年度をまたぐような場合は、担当者が異動していることもあり、この確認作業によって、それまでの評価や更新方策案を確実に生かすことができます。

実態を把握する

学校教育目標に関する児童生徒の実態を把握します。より正確に把握することが大きな効果を生みます。資料を集めたり、関係者が意見を出し合ったりするなど工夫します。その時に、子どもたちの願いや保護者・地域の人々からの声を聞くことも大切です。

めざす姿を設定する

捉えた実態とめざす姿から、つけたい力や態度等を具体的な形で設定していきます。具体的なめざす姿については、子どもたち自身がその必要性を認識していることが大きな力になります。そうすることで、到達度が子どもたちや教職員にはっきり意識できるようになり、継続的な更新が行いやすくなります。

具体的な教育活動を決定する

めざす姿に近づくためにどんな教育活動が有効かを考え決定します。これまでの活動を参考にするとともに、目の前の児童生徒の実態に合った新しい活動を工夫する柔軟性が大切です。そして教育活動やその具体的な基準についての広報活動を行います。

教育活動を評価する具体的な基準を決める

教育活動を決定したら、必ずそれを評価することを考えます。教育活動を分析し、その活動に関して、これまでの実施状況等をもとに具体的な基準を設定します。その基準により、達成したかどうかの判断を行うわけですから、その基準について教職員、時には児童生徒を含めた共通理解を図ることが大切です。

DO 実行する ステップ

教育活動を展開する

計画された教育活動を展開します。その時に保護者や地域の人たちの参画について検討する姿勢が望まれます。

具体的な基準に従って活動を確認する

教育活動の途中で児童生徒の実態の変化や活動の状況などを、具体的な基準に従って確認します。その結果を検討することで、教育活動の次の段階が見えてきます。

(必要に応じて)

必要に応じて教育活動や具体的な基準の修正を行う

具体的な基準による確認の結果から判断し、児童生徒の実態により適した活動に変更することも大切です。また基準の適正さも検討します。

修正を行うときには、その理由を明確にしておく必要があります。

CHECK 評価する ステップ

めざす姿に対する達成度を判断する

児童生徒の達成状況を判断します。

具体的な基準に従って活動状況を確認する

教育活動を具体的な基準に従って確認します。活動の状況を的確に判断することが大切です。

教育活動の妥当性を判断する

確認したことをもとに、自らの教育活動を振り返ります。さらに、子どもたち自身が自己評価や相互評価を行った結果や、教育活動に対する子どもや保護者、地域の人々の意見などを集約します。そして、教育活動の妥当性を検討します。

めざす姿や具体的な基準の妥当性を判断する

評価結果の検討から、当初設定しためざす姿や具体的な基準が、児童生徒の実態に対して適切なものであったかを判断します。

ACTION 更新する ステップ

めざす姿や具体的な基準を見直す

評価結果から判断し、次のめざす姿や具体的な基準をどこに置くのかを検討します。

教育活動を見直す

教育活動に対する評価から、活動を見直します。良かった点、悪かった点をつぶさに見つめ、その根拠を明らかにしておきます。見直すための資料の一つとして、子どもたちや保護者、地域の人々の意見が把握されていることも大切です。

更新方策案を決定する

評価結果と活動の見直しから、更新の方向性や活動の具体的な組み立て、活動を支える学校としての体制や教育環境の再設計などを検討し、その結果を次のPLANに確実につなげる手だても整えておきます。

IV 実施にあたって

- * この手引き書は、各学校が学習者起点の立場に立って学校教育を推進するための参考となるよう作成しました。

- * 学校自己評価システムを活用して評価活動を実施するのは、学校教育推進のためであり、評価結果を学校間の比較や人事考課等に使用することを目的とするものではありません。

- * この手引き書で示していることや、資料として付けてあるシート等は参考例です。各学校の実態や、取組課題に合わせて適切な評価活動が行われるように検討してください。

- * 実施にあたっては、校内研修等を通じ、教育目標や努力目標等の再確認を行ったり、これまでの評価のあり方や課題などについて十分話し合ってください。その上で学校自己評価や計画的な評価活動についての共通理解や検討を行ってください。学校自己評価システムを定着させるためには、各学校の実態に即した手順や、使いやすい独自のシートの開発が必要です。手引き書を参考に、よりよいものをめざしてください。

- * 学校自己評価システムを活用した評価活動の実施にともない、その取組状況や課題、具体的な教育活動、中間評価、そして結果などを、PTA総会や懇談会など直接的に伝える機会をはじめ、学校からのたよりやホームページなどを使い、積極的に発信していくことを検討してください。

- * 教育は主体的な実践の積み重ねによって実現されます。この手引き書の発行を契機に各学校で評価活動についての主体的な取組がなされることを願っています。

- * 三重県の学校の実態にあった手引き書の作成を心がけています。取組の中から出てきた課題、優れた方法や実践を反映させながら、今後手引き書を修正していきます。

V 資料

資料 1（学校自己評価システムシートについて）

ここでは3つのシートについて説明します。

P D C A サイクル確認表 A
課題別評価表 } セットで使うことを想定しました。

P D C A サイクル確認表 B 行動の確認と評価の両方記入することを想定
しました。

学校自己評価システムシート全般について

- ・ これら3つのシートは全て参考例です。
- ・ これらのシートは全ての教育活動において使用するわけではありません。学校自己評価システムにそった活動について、その流れや結果を明らかにするために使用するものです。
- ・ 学校全体で取り組む実践から、教科会や一人ひとりの授業改善等、取り組む範囲や担当者の数など様々な場合が想定されます。
- ・ 取組課題やその担当者、責任者等を確認表に明確にします。
- ・ これらのシートを、教育活動をより確実にを行うために、計画の時から使用することもできます。また確認用として教育活動の後に使用することもできると考えます。

P D C A サイクル確認表 A

- ・ 実態把握は、計画の全ての段階に係わると考えます。計画全体の中で、確実な実態把握が行われるように、実態把握の時期や方法を検討してください。
- ・ スペースを利用して、参考資料（会議の事項書、配布物等）の名称をメモしておくといいでしょう。
- ・ 全体の流れの理解や、手順の確認を目的にしています。具体的な項目や評価の結果などは、課題別評価表に記載します。

課題別評価表について

- ・ 誰が見ても分かるように、必要なことを簡潔に書くことが大切です。検討事項や詳しい資料などが必要な場合は、資料を添付したり資料名やその保管場所を明記しておくといいでしょう。活動の流れや、更新方策案が分かりやすく書かれていると、引継書として利用することもできます。
- ・ 中間評価については、取組課題や計画された教育活動等により、適切な時期、回数を考えてください。

P D C A サイクル確認表 B

- ・ 行動の確認と評価の両方を記入することを想定しました。スペースを使って必要事項をメモし、一枚でサイクル全体を把握できるようにします。

1 学校自己評価システムシート（例）

① PDCAサイクル確認表A

取組課題		担当名	
		責任者	
計 画	継続課題の更新方策案確認 更新方策案の確認を行った	実態把握	
	課題の設定 同課題で取り組む 課題を修正して取り組む 新たな課題で取り組む	課題に関連した実態把握を行った 次の人たちからの意見を聞いた 児童生徒 保護者 地域の人 学校評議員 教職員	
	めざす姿の設定 実態把握を基に、つきたい力や態度等、具体的に 設定した		
	具体的教育活動設定 めざす姿を達成するための教育活動を設定した		
	評価のための具体的な基準作成 各具体的教育活動に対する数値目標を設定した 評価のための基準を作成した 教育活動及び評価の計画を次の人たちに発信した 児童生徒 保護者 地域の人 学校評議員 教職員		
実 行	実践 計画どおり実践を行った 計画どおり実践を行えなかった 情報発信のために実践記録や資料等 を保存した	中間 評価	評価基準に従って活動を確認した 次の人たちからの意見を聞いた 児童生徒 保護者 地域の人 学校評議員 教職員
		修 正	修正は不必要 教育活動を修正した 基準を修正した
評 価	評価の実施 活動状況を確認した 達成度を確認した 次の人たちからの意見を聞いた 児童生徒 保護者 地域の人 学校評議員 教職員		
	評価結果の検討 めざす姿や基準の妥当性を判断した 教育活動の妥当性を判断した 次の人たちに評価の結果を発信した 児童生徒 保護者 地域の人 学校評議員 教職員		
更 新	めざす姿や基準の見直し 修正する必要はない 修正する必要がある		
	教育活動の見直し 良かった点とその根拠を明らかにした 悪かった点とその根拠を明らかにした		
	更新方策案の決定 更新の方向性を検討し、まとめた 教育活動の具体的な更新方策を検討し、まとめた 学校としての体制や教育環境の再設計を検討し、まとめた 次回も同課題で取り組む必要がある 今回は同課題で取り組む必要はない		

② 課題別評価表

取組課題	担当名	
	責任者	
継続課題の更新方策案確認	実態把握	
めざす姿 つたい力や態度等具体的に書く。	取組課題や具体的教育活動に関する児童生徒の実態を記述する。	
具体的教育活動 めざす姿に近づいたの教育活動を書く。		

<具体的な基準>

	基準				
	5	4	3	2	1
具体的な教育活動を評価するたに、行動や数値等を使った具体的な基準を設定する。					

<中間評価>

活動の確認	月 日現在		月 日現在	
	実施状況	達成率	実施状況	達成率
中間評価の結果を数値や文章で記述する。 評価のたの等の場等記する。				
評価				

<教育活動・基準の修正>

月/日	教育活動の修正	基準の修正
中間評価の結果を正する必要がたのを記述する。		

<評価>

教育活動の確認	実施状況	評 定				
		5	4	3	2	1
具体的な基準に従って活動状況を確認し、自らの教育活動を振り返ります。 その結果を とに、教育活動の妥当性やめざす姿に対する到達度、めざす姿や具体的基準の妥当性判断し記録する。						
評価						

<更新方策案提案>

更新の方向性や活動の具体的な組み立、活動を支える学校としての体制や教育環境の再設計などを検討しまとるととに、次の担当者に引き継ぐ内容や次のPLANにつなげる手立を整えおく。

③ PDCAサイクル確認表B

取組課題		担当名	
		責任者	
計 画	更新方策案の確認を行った つきたい力や態度等、めざす姿を具体的に設定した めざす姿を達成するための教育活動を設定した 具体的な基準を作成した 教育活動及び評価の計画を発信した (めざす姿や具体的な基準)	児童生徒 地域の人 教職員	課題に関連した実態把握を行った 次の人たちからの意見を聞いた 保護者 学校評議員 (特記事項)
	計画どおり実践を行った 情報発信のために実践記録や資料等を 保存した (実践時に気づいたこと)	中間評価	具体的な基準に従って活動を確認した 多くの人たちからの意見を聞いた (内容)
行		修正	修正が必要 (修正内容)
評 価	活動状況を確認した 評価のための資料を多くの人から集めた めざす姿や基準の妥当性を判断した (評価結果)		めざす姿に対する達成度を判断した 教育活動の妥当性を判断した 評価の結果を発信した
更 新	めざす姿や具体的な基準を見直した 更新方策案を作成した (更新方策案)		教育活動を見直した

2 平成12年度に実施された県立学校での取組実践項目

- ・時間の厳守
- ・生徒の喫煙防止
- ・登校時間の厳守
- ・遅刻の減少
- ・基本的生活習慣の確立
- ・基本的マナーを身につけよう
- ・整理整頓の徹底
- ・挨拶の励行
- ・登校時のバス乗車マナーの向上
- ・健康診断後の事後治療
- ・生徒保健委員会の活性化
- ・単車通学生の交通安全指導
- ・自転車通学安全指導
- ・中途退学者の減少
- ・スクーリング・添削指導の充実と社会性の育成
- ・人権教育の推進
- ・同和教育の推進、報・連・相システムの確立
- ・心のかよった同和教育の実践
- ・仲間づくり
- ・読書の習慣化
- ・図書貸出数の増加
- ・豊かな人間性確立のための「朝の読書」の効果的な実施
- ・学校環境改善
- ・教育環境の美化・充実
- ・教育活動の充実による休退学者数の減少
- ・出席率の向上
- ・節電
- ・節約
- ・光熱水量費の削減
- ・清掃活動の徹底
- ・ゴミの減量と分別とリサイクルの推進
- ・環境美化に対する生徒への意識づけと校内外のゴミの減量化
- ・資源ゴミ完全分別収集運動
- ・教室等の消灯の励行、戸締りの励行
- ・自己表現力の育成
- ・進路意識の育成
- ・2年生全員の職場体験実習の実施
- ・21世紀への学校改革へ向けて
- ・単位制の趣旨の具現化、充実発展

- ・ブレスクール・アドバイス事業を学校全体で取り組む
- ・65分授業の充実（シラバスの作成と公開）
- ・楽しい授業づくり（生徒の意識調査・研究授業等の活用）
- ・学校行事への参加
- ・環境問題について考え行動する
- ・一般社会人の入学を推進させる
- ・会議の効率化
- ・校務分掌の見直し
- ・運動場の除草
- ・厨房作業への支援
- ・パソコンアレルギーの克服
- ・手洗いの励行
- ・学部園作りと環境整備
- ・明るく、きれいな学校をつくる
- ・地域との融和
- ・養護学校のセンター化

三重県の実態にあった手引き書を目指しています。ご意見、ご質問については、担当までご一報ください。

三重県総合教育センター

企画振興部 調査研究担当

〒514-0007

津市大谷町12番地

TEL 059 - 226 - 3526 (直通)

FAX 059 - 226 - 3706